

## 令和 3 年度東京都広報コンクール 広報紙部門 総評

### 大井委員

2011年3月11日午後2時46分、大半の都民はこの時どこで、何をしていたかを、恐らく思い出すことができるだろう。評者は、春休み中ではあったが、教授会とサブゼミが行われ、教授会からサブゼミをはしごしているときだった。長く続く大きな揺れにおびえながら研究室の柱をつかみ、書架から書籍などが崩れ落ち床を埋めつくしてく光景を呆然と見つめていた。大きな揺れと同時に防火シャッターが起動したため、フロアに閉じ込められるだけでなく、長時間留め置かれた。余震が収まらぬ中、高層階から時間をかけて階段を下ってようやく校舎外に出た時、陽はとっぷり暮れていた。目の前の光景はそれぞれ異なれ、その時を、その後の灯火生活をはじめ、さまざまな活動の制約を憶えておいでだろう。そして今年この日この時間を、一個人として、一職業人として、一生活人として、どのような思いで迎えたのだろうか。

「あれから〇〇年、いま…」式の記事のアプローチをカレンダー・ジャーナリズムという。やや批判的なコンテクストで語られることが多い。例えば「8月ジャーナリズム」がある。原爆投下そして終戦。広報紙にあっても、大きな惨禍をもたらして終わった大戦を振り返り、平和への思いをこの日再び確認し、後の世代へとさらに継承していく。そうした契機となる。平和祈念の企画、平和都市宣言、平和啓発事業などに関わる記事は、いずれもしっかりとした問題意識に基づく十分練られた構想の記事に仕上がっており、いずれも読み応えがあった。

大震災報道は、「3月ジャーナリズム」化したのではないか、ここ数年そうした問題提起がなされ、小職もそれに若干関わった。今年は大震災から10年の節目ということもあり、多くのニュースメディアが、震災を様々な方法で取り扱っていた。

広報紙でも、応募作ではそれほど多くはなかったが、10年目を迎え、大震災はどのような体験だったのか、その後われわれはどのような道を歩んできたのか、を振り返っていた。小職は以前から広報紙の「読み比べ」を推奨してきたが、震災もこの読み比べの試みに相応しいテーマではなかろうか。実際あえて応募作にこのテーマを当てた広報紙は、視点の確かさ、問題を捉える深さ、紙面の訴求力にみるものがあった。ある程度の自信があったからこそ、このテーマをぶつけてきたともいえるだろう。「奇跡の一本松」のたたずまいが震災の全体を表象するように、それぞれの地域には震災を表象するそれぞれの「奇跡の一本松」があったはずであり、それを的確に把握し、震災のイメージ装置とすることができた自治体、広報紙がその役割を十全に果たすことができる手立てをもてるようになった。

コンクールの審査を終えた感想だが、昨年と比べ粒ぞろいの作品が多く、しばし反芻して読み返す作品が目立った。概して事件・事故のような突発的事態は眼につきやすく、大きな関心と呼ぶ。しかし環境の変化のような現象はなかなかすぐには認識されない。目に見えるような変化が現れた時には事態はかなり深刻になっている。そうした問題にじっくり腰を据えて取り組む広報紙は確かに読み応えがあった。紙面化には確かな問題意識に基

づくだけでなく、各方面にわたる相当の準備が必要だったことが窺われ、そうした入念な準備が優れた作品を生み出したのであろう。敬意を表したい。

最後に、ルーティンに処理される情報提供に触れてみたい。実際のところ、この種の情報は自治体広報において、もっとも「利用率」の高いセクションであり、コンクールなどでの評価の微妙な差異はこの辺から来ることを再確認すべきであろう。

## 金井委員

今回の応募 39 作品はいずれも情報区分が明確であり、読者を迷わせることもなく適切に情報を伝える広報紙だと思います。紙面上の要素は「視認性」、「可読性」、「判読性」に配慮された編集がなされていて、全体としてのわかりやすさにつながっています。特集も質の高いものに仕上がっています。内容、切り口、タイミングなど、よく考えられ丁寧に作られている印象です。テーマは各自治体さまざまですが、杉並区の福祉、千代田区や中野区の子育て、目黒区や福生市の防災といった定番ものだけでなく、江戸川区の段差ゼロへの取り組み、足立区の選挙の裏側など特徴あるテーマも見られました。

今回、受賞した広報紙と選にもれた広報紙の評価の差は大きくはなく、どの自治体であっても企画力、編集力ともに着実に向上していることが感じられました。